

ウミタケ *Barnea japonica* (Yokoyama)

【選定理由】

本種は内湾の潮下帯の泥底に生息する。かつては房総半島以南の内湾から記録されていたが、有明海以外での最近の記録はきわめて少ない (和田・他, 1996)。県内では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化している。本種は、1997年三重大学実習船勢水丸のベントス調査によって伊勢湾湾口部 (水深 12 m) で死殻破片、名古屋港沖で 2008, 2009 年に死殻破片 (図 2, 3) が数個体採集されていたが、生息は確認されていなかった。2009年汐川干潟で生貝が 2 個体採集された (西, 2010; 図 1)。その他の海域では死殻も稀にしか見られない。絶滅の可能性が非常に高い種であると評価された。

【形態】

殻長約 8 cm で、殻質は薄く脆い。殻の膨らみは強い。殻は白色で、生きている時はやや厚い殻皮を被る。殻の前端は丸みを帯び、後端は斜めに裁断状で両端とも大きく開く。後域にはやや長く強い棘が並ぶ。



1: 豊橋市汐川干潟, 2009年7月22日, 西 浩孝撮影, 2, 3: 名古屋市名古屋港沖 (ドレッジ水深 5-15 m), 2016年10月25日, 4: 福岡県柳川市沖, 1999年8月30日, 木村昭一採集

【分布の概要】

【県内の分布】

近年汐川干潟で生貝が採集されたが、その他の海域では死殻も稀である。

【世界及び国内の分布】

日本、台湾、中国、東南アジア。国内では房総半島以南、瀬戸内海、有明海に分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような干潟から潮下帯の環境は悪化しているので、本種の生息場所、個体数とも著しく減少したと考えられる。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【引用文献】

西 浩孝, 2010. 三河湾で絶滅危惧種の二枚貝ウミタケの生息を確認. 豊橋市自然史博物館研報, (20): 15-17.
和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp.

(木村昭一)